大決壊
～芽生え～

☆イリア＝キリシマ
～芽生え～

「ああ、もうこんな時間になってたんだ……」

　時は夜の十時過ぎ。
　開け放たれた窓からは秋風が吹き込んできてレースのカーテンをなびかせ、ふと顔を上げた少女の、ブロンドのツインテールをイタズラっぽく揺らしていく。

　まだまだ子供っぽい顔つきだが、少しずつ大人へと成長しようとしている顔。
　それでもまだ子供っぽく華奢で痩せ細っていて、薄手のスズランのようなワンピースには肩甲骨が浮き上がっていた。

　机に向かって読書している少女――。
　名前を、イリア＝キリシマという。

　日系アメリカ人の父と、日本人の母のあいだに生まれたハーフだ。
　幼少のころは貿易商をしている父に連れられるようにして海外を転々とし、最近では日本に落ち着くことができている。

　しかしイリアのブロンドは日本ではあまりにも浮きすぎている。
　だからイリアはなかなかクラスに馴染むことができずに、いつも読書することにしていた。

　母の影響もあって、日本語は不自由なく読み書きすることができるし、こんなにも表現豊かな言葉は他にはないとイリアは思っていた。

　そんなイリアは読んでいた本を閉じ、椅子から立ちあがる。
　そして忍び足でドアを開けると、自室から忍び足で廊下を歩いて行く。

「もうみんな寝ちゃってる、よね……」

　イリアが住んでいるのは、広々とした洋

館だった。
　明かりの落ちた長々とした廊下には、誰もいない。
　父は今日は出張だし、母は明日が早いからといってもう寝ているはずだ。
　メイドたちはもう帰ってしまって、明日の朝にならないとやってこないだろう。
　つまり、いまこの洋館で起きているのは、イリアだけと言うことになる。

「おトイレ、行こ……」

　暗闇に呟くと、イリアはこっそりとトイレへと向かい、入ると、音が立たないようにドアを閉める。
　そこは狭い一人だけの空間だった。
　ちょこん、
　と目の前にあるのは、洋式のトイレ。
　イリアはそのふたを開くと、

「あっ」
　ちょっと気が抜けてしまったのか、

プシュ――ッ！
　　ジョボボッ！

　チビッた……、にしては多すぎる量のお

しっこを放ってしまう。
　クロッチの裏側に、なんとも言えない温もりが染みこんでいく。

「やだ。ずっと我慢してたから、ちょっとだけ出ちゃった……」

　裾の短いワンピース型のパジャマの上から下腹部をさすってみると、そこは水風船のようにプックリと膨らんでいた。
　今日の夕方あたりから、ずっとおしっこを我慢していたのだから仕方のないことだろう。

「やっとおしっこできるんだ」

　そう考えただけで、なぜかイリアの頬は微かに赤く染まる。
　イリアには、誰にも言えない秘密があったのだ。

　――おしっこを我慢してから出すと、凄く気持ちいい。

　イリアは、いつのころからかその気持ちよさの虜になり、いつも人知れずにおしっこを我慢する癖があった。

　だが、それだけなら誰にだって経験があることだろう。
　イリアの、本当の秘密。
　それは。

「ずっと我慢して、ちょっとだけ漏らしちゃったから、黄ばんじゃってる……」

　イリアはトイレを前にして、スズランワンピースをめくり上げる。
　ショーツはシンプルな白地で、小さなネコの顔がたくさん描いてある。イリアが愛用しているショーツだった。

　そんなコットンショーツの、おまたに当たる二重布……クロッチは、外側まで黄色い染みが滲み出してきていた。
　女の子の恥ずかしい染みを隠すためのクロッチは、洗濯してもとれないほどにイリアのおしっこが染みついていた。

「でも、我慢ももうお終い……はふぅ……」

　深くため息をつくと、イリアは洋式のトイレに腰掛ける。
　……ショーツを穿いたままで。

そう。
イリアの誰にも言えない秘密……、それは、ショーツを穿いたまま自らの意思でおもらししてしまうことだった。
我慢している尿意を放つと凄く気持ちいいし、それにショーツを穿いたままするとお尻をなでなでされてる感じが心地いい。
イリアがおもらし遊びの魔力に取り憑かれたのは、まだ思春期を迎える何年も前のことだった。

「はぁ……やっとおしっこできるんだ……」

うっとりとため息をつき、イリアは少しずつピッチリと閉じられたおまたの緊張をほどいていく。
もう膀胱がパンパンになっているというのに、いざショーツを穿いたままおしっこをしようとすると緊張してなかなか出てきてくれなかった。
だけど、そこは何度も自分でおもらしをしてきたイリアだ。

ジュワ……。

　クロッチの裏側に広がる、ほんのりとした温もり。
　イリアの黄ばんだクロッチに、暗い染みが浮き上がり、無毛の縦筋の痙攣が浮き上がった。

「あっ、出ちゃう」

　ブルルッ。
　イリアは小さく身体を震わせる。
　少女の太く短い尿道をおしっこが走り抜けていき、ゾクゾクとした寒気を覚え……、その直後。

　しゅいいいいいいいいいいい……。

　コットンショーツの中からくぐもった水音が鳴り響き、クロッチの暗い染みが大きさを増していった。
　イリアは、自らの意思でおもらしを始めたのだ。

「あっ、あああぁぁ……あっ、あっ、あっ。出ちゃってる……。パンツ穿いてるのに、おしっこしちゃってるんだ……」

　クロッチの裏側におしっこが弾けると、おまたをくすぐっていく。その感触におまたが熱くなっていく。
　おしっこは緊張が解けてきたからか、少しずつ勢いを増していった。

　ジョボボッ、
　　じょぼぼぼぼぼぼぼぼ……。

「はふう……おもらし、気持ちいいよぉ……」

　おまたを撫でられる感触に、イリアの頬は紅潮し、とろんと緩んでいた。
　今にも涙が溢れ出してきそうになっている瞳も、うっとりとまなじりを下げていた。
　その吐息は、官能に熱くなっていて……、

「あああ……んっ、ふうう……」

　イリアは、子供とは思えぬほどに色っぽい吐息をつく。
　こうしている瞬間にも、イリアのおまたからはおしっこが溢れ出してきていて、お尻にまで大きな染みが広がっていた。

しゅいいいいいいいいい……。
ぽた、ぽたた、ぽたたた……。

お尻へと広がったおしっこは、ショーツでは吸収しきれずに洋式トイレの水面へと落ちていく。
イリアの小さなお尻を、生温かい手が愛撫していった。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あった、かぁい……」

背徳的なぬくもりにおしりを包まれながら、イリアは更におまたをほどいていく。

しょわわわわわわわわ……。

勢いよく尿道からおしっこが噴き出していくと、クロッチという二重布を破らんばかりに出てくる。
もしもショーツを穿かずに尿道を前に向ければ、トイレの外にまでおしっこが飛んでいたことだろう。
それでもイリアはお行儀よく洋式のトイレに腰掛け、はしたない行為に耽っている。

「おまた、温かいよぉ……。あはっ、お尻、なでなでされてるみたい……はふぅ……」

　だがどんなにおしっこを我慢していたとはいえ、おもらし遊びにも終わりはやってくる。
　少女の太い尿道では、尚更おしっこが終わる時間も早くなる。

　シュイイイイイイイイ……。
　　――プシャア！！

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……はぁぁぁ～！」

　ブルルッ！
　大きく痙攣すると、イリアのおもらしは唐突に終わった。
　レモン色に濡れそぼったショーツにはイリアの縦筋が食い込んでいて、ヒクヒクと痙攣しているパイパンを浮き上がらせていた。
　イリアはこの年になっても、未だ産毛さえも生えていないパイパンだったのだ。

「はぁ、はぁ……。終わっちゃった……。おしっこ、もう全部出ちゃった……」

　イリアはキュッとおまたに力を入れてみるも、しかし一滴のおしっこも出てこなかった。
　イリアの快楽に緩みきったおまたは、無意識のうちに最後の一滴まで出し切ってしまったのだ。

「はふぅ……。気持ちよかったぁ……。耳鳴り、凄いの……」

　気がつけば、夏虫の大合唱のように甲高い耳鳴りが、頭の中で響き渡っている。
　それほどまでに、イリアはおもらし遊びで興奮していたのだ。
　……だが。

「くしゅんっ」

　洋式トイレに腰掛けたままのイリアは、可愛らしいくしゃみをしてしまう。
　おしっこの温もりを宿したショーツは早くも秋の空気に冷えてきて、ぺったりとイリアのお尻に貼りついてきていた。

「気持ちよかったのに……。ぱんつ、冷たくて気持ち悪い……」

　ペッタリと貼りついてきてるショーツは、イケナイ遊びをしたイリアを責め立ててきているようでもある。
　だが、最近ではその感触さえもイリアは気持ちよく感じるようになっていた。

「ぱんつ、冷たくて風邪ひいちゃう……」

　呟くイリアだけど、濡れそぼったショーツを穿いたまま立ちあがると、ワンピースの裾を正す。
　そしてティッシュでおまたを拭くことなく、水洗トイレの水を流してしまった。
　トイレに溜まっていたレモン色のおしっこが勢いよく流されていく。我慢していたから、濃いレモン色をしていた。
　これでイリアのおもらし遊びをした証拠の一つは消える。

　あとは、お尻にまとわり付いてきてるショーツ――。
　だがイリアは最初からこのショーツを脱ぐつもりなんてなかった。
　トイレから出ると、イリアは再び自室へ

と戻る。
　そして天蓋付きのダブルベッドの下に手を伸ばすと、取りだしたのはピンクのビニル袋だった。
　その袋はもこもこしていて、可愛い女の子の写真がプリントされていた。

　――紙おむつ、である。

　イリアはその袋から一枚の紙おむつを取りだす。
　ピンクの花柄模様があしらわれていて、最初のころは紙おむつを穿くのなんて嫌だったけど、今ではすっかりイリアのお気に入りになっている。

　おねしょ癖のあるイリアはいつも寝るときにはおむつを充てて寝ることにしていた。
　このことをパパもママも知っているし、メイドも知っている。
　だけど、ここにもイリアの誰にも言えない秘密があった。

「おむつ充てて寝ないと……ね」

　イリアは、ベッドの上に広げた紙おむつに座ると、ゆっくりと紙おむつを充てていく。
　……おもらし遊びに濡れそぼったショーツを穿いたままだというのに。
　イリアの誰にも言えない秘密。
　それは。

「んんっ」

　おむつを穿くと、密閉したその内側におしっこの温もりが蘇ってくる。
　イリアは、おもらししたショーツを穿き、そのショーツを覆うようにしておむつを充てて寝ることにしているのだ。

「おしっこ、温かくなってきて気持ちいい……」

　生温かい感覚がお尻にぺったりと張り付いてきて、なんとも言えない気持ちよさがお尻を包み込んでくれる。

「あとは、寝る前に水分補給、だよね」

　イリアは机においてあったティーポット

を傾けると、カップに紅茶を注ぎ込んでいく。
　それを一気に飲み干すと、イリアは部屋の明かりを落としてベッドへと身体を横たえた。
　天蓋付きのダブルベッドは、イリアの小さな身体を易々と受け止めてくれる。

「明日も学校……。おやすみなさい……」

　イリアは誰にともなく呟くと、ゆっくりと瞳を閉じた。